

最優秀賞  
文部科学大臣賞



機械いじり

福島県郡山市立小原田中学校

二年 星 祐 成

僕は車が好きだ。機械が好きだ。とても好きだ。母が言うには小さい頃から車のおもちゃが大好きで、なぜかタイヤだけで遊んでいたようだ。幼稚園の頃の愛読書は車の取扱説明書だった。またその頃から車のエンジンルームを見ていたようだ。小学生になると、テレビのリモコンやおもちゃなどを分解しては元に戻せず壊していたそうだ。そして小学校四年生を過ぎたあたりから分解のレベルは加速的に上がり、自転車を分解して、組み立てて元通りに戻せるようになった。壊して終わりではなくなった。

周りの人は皆決まってこう言う。「こりゃ車の整備士で決まりだな。」

僕もそう思っていた。

そんな僕はとうとうエンジンに手を出した。

エンジンの構造や仕組みはインターネットを使って調べ上げた。「どこかにいい教材となるエンジンないかな。」と思っていたが、エンジンなんて都合よくそこらに転がっているはずもなく、エンジンを分解したい気持ちばかりがつのった。

ある日、父の実家へ行ったとき、今は使っていない曾祖父のバイクが実家の奥に眠っていたのを見つけた。ちょっと前まではたまたまエンジンをかけてい

たらしく、今でもエンジンは生きていたということだ。次に行くとき、僕は工具を持って行った。そう、やると決めていたのだ。ついにエンジンを分解するときにきた。教材は、原付バイクのエンジンで、50ccの2サイクル単気筒エンジンだ。まずは、エンジン周りのカバーや配管類を外していく。工具が入らない所や、ネジが固くて回らない所などがあり、簡単ではない。なんとかキャブレターを外し、シリンドラーヘッドを外したら、シリンドラーブロックも一緒に抜けて、「スポン」とピストンが抜けた。さすが付着し、黒く光るピストンを目の前にしてとても興奮した。鈍く怪しげに光るピストンピン、コンロッド、やつと実物を手にすることができたと思った僕は、迎りが暗くなるまで夢中だった。

後日、バラしたエンジンを元通りに組み上げにかかると、そこで事件発生、ピストンをブロックに入れるときに、あろうことかピストンリングを破損してしまっただけ。引つかかったまま、無理に入れてしまったために、リングが割れてしまったのだ。「やっってしまった。」

父に相談すると、

「あはは、やっぱりやつたな。無理に入れると割れるんだぞ。」ピストンを組むときには専用の工具を使わないとダメなこともあるのだと父は言う。そう、僕の父は元整備士、若い頃は走り屋だった男だ。

なんとか元通りに組み上げたエンジン。ただピストンリングは割れている。エンジンをかけてみる。「ブブブン」かかった。自分でバラして組み上げたエンジンがちゃんとかかったのだ。すぐくうれしなかったし、すぐくドキドキした。しかし、エンジンのパワーが全然ない。スムーズに回転は上がるけれど、トルクがない感じがする。そう、スカスカである。当たり前だ。なにせ、ピストンリングが割れて

いるため圧力が逃げているからだ。

今回、初めてエンジンを分解して組み上げてみて、とても楽しかったし、すぐく勉強になったと思っっている。結果的にはエンジンを壊してしまったことに変わりはない。父には笑われ、母には怒られるはめになった。なぜこうなったのか。原付バイクのエンジンなんて、簡単に分解組み立てできると思っていた。インターネットでいろいろ動画も見えて、自分にもできると思っていた。確かに、構造も仕組みも単純だし、部品数も少なく簡単だったはずだ。けれども、僕にはできなかった。知識と経験が必要だと気づかされた。けれども、僕は、本当に機械が好きなんだと改めて気づいたし、大人になっても、きっと同じことをしているのだろうなと思った。

エンジンを分解して元通りに組み上げるというミッションは、コンプリートとはいかず、未完成という結果にはなったけれど、僕はあきらめずに、割れたピストンリングの換わりをなんとか入手して、リベンジをするつもりだ。いつか車のエンジンも、分解、オーバーホールをしたいと思います。父はこう言う。「分解するのは簡単だ。不具合な所を見つけて、正常な状態にして組み上げて、分解する前よりも良い状態にしなければ意味がないだろう。」

全くその通りである。僕は、この先どの学校へ進学し、どんな仕事に就くかまだわからないけれど、きっと機械に触る仕事に就くのだと思っっている。いろいろな知識や経験を積んで、仕事と趣味を両立させて、楽しく機械いじりができるように頑張っていきたい。